

暮らしの中の

国語慣用句辞典

暮らしの中の
国語慣用句辞典

文学博士 吉田 精一
日本大学助教授 薬師寺 章明
共編

集英社

吉田精一（よしだ・せいいち）

明治41年東京生まれ。東京大学国文学科卒。東京教育大学教授、東京大学教授、埼玉大学教授を経て、現在、大妻女子大学文学部長。日本近代文学会代表理事。文学博士。「現代文学論大系」（昭和30年度芸術選奨）。「自然主義の研究」（昭和33年度日本芸術院賞）。「明治大正文学史」「日本近代詩鑑賞」「芥川龍之介」「現代文学と古典」「古典文学入門」「近代文学評論史・明治編」等。

薬師寺章明（やくしじ・のりあき）

大正14年下関生まれ。日本大学国文学科卒。現在、日本大学助教授。日本近代文学会会員。「評説牧野信一」「野間宏研究」「評説武田麟太郎」等。

〈執筆協力〉

嘉部雄次

田中和夫

田中三三良

永岡健佑

山本直哉

〈編集協力〉

エディトリアル・プランニング

辞 用 慣 語 国 語 の 中 の

昭和五二年二月一〇日
昭和五二年三月一〇日
第一刷印刷
第一刷発行

編 者 吉 田 精 一

薬 師 寺 章 明

発 行 者 堀 内 末 男

印 刷 所 図 書 印 刷 株 式 会 社

発 行 所 株 式 会 社 集 英 社

東京都千代田区一ツ橋二一五一一〇
電話 販売部〇三(二三〇)六七一
出版部〇三(二三〇)六三五一

©1977

落丁・乱丁の際はお取り替えいたします

0581-439001-3041

まえがき

最近ある新聞の「今日の問題」欄に、次のような文章が載っていた。

「気が置けない人」といえば、気楽で心からうちとけることができる人、というのがふつうの意味だが、近ごろの若者たちの間では全く別の意味に使われているらしい。つまり「気が置けない」というのは、「堅苦しくて気を許せない」状態だというのだ。

また「せわしない」という言葉がある。「せわしなし」の口語で、「非常に忙しい」の意味だが、これを「せわしくない」と解する者が多いとも聞いた。(略)

同じような例は「情けは人のためならず」ということわざにも見られる。ふつうの解釈では、他人に情けをかけておけば、めぐりめぐっていつかは自分に返ってくる、ということだ。が、これも最近、他人にあまり情けをかけるのは、その人間の将来のためによくない、といった解釈をする若者が多いという。たしかに字面通りに「直訳」すると、そんな意味にとれないこともない。

このように、今日の国語の慣用句や、古来の故事・名言が、誤用や悪用されている例が少なくな
い。あるいはこれは映像時代の影響で、若者たちの文字ばなれが著しくなったためとも考えられる。
それはたしかに時代の状況に帰すべきにしても、今日の生活の中で和漢の慣用句がしばしば用い
られ、生きたことばになっている事も否定できず、その正しい意味、用法を知らなければ、大きな
恥をかくことになる。

編者はここに着眼して、生活の中に生きている慣用句の辞典を世に示し、ことばの乱れを正す一
役にも立たせようとした。

実際の編集に努力されたのは薬師寺章明君である。同君に多大の謝意を表する。

昭和五十一年秋

吉 田 精 一

この辞典の特色と使い方

一、編集方針について

- (1) この辞典は「新修類語用例辞典」の姉妹編として編集したもので、表現を豊かにするために用いられている一般的な慣用句を約六〇〇〇項目収録し、手紙文・レポート・論文などの文章表現や、会話・スピーチ・講演などの話術を工夫する場合に役立つように配慮した。

- (2) 収録した慣用句は、実生活でしばしば用いられる国語慣用句を中心に、故事名言・成句・ことわざなど、頻度数の多い句を幅広く選び、語句の的確な使い方が身に付くように用法を示して実用性を高めた。

- (3) 解説は、意味と用法に加えて、言い替えもできる

ように類句・類語などを入れることに努め、更に出典を示して、より一層理解しやすくなるように心掛けた。

- (4) なお、本文に収録しきれなかった金言名言の類は、付録として巻末に約四〇〇項目を載せ、むずかしいものには簡単な解説を加えて充実を図った。

二、見出し語について

- (i) 見出し語は、原則として当用漢字及び現代かなづかいにより、ゴチック体とアンチック体の活字を用いて、五十音順に配列した。漢字には、すべてふりがなをつけた。

(例)

合い縁奇縁 あいきよぐゑん 人と人とのつながりは……

愛敬付き合い あいきょうつきあひ 心の通い合う付き合いではなく

愛想が尽きる あいそうがじんきる 愛情や好意が全くなくなって……

- (2) 見出し語の漢字は、原則として当用漢字を用いたが、成語・故事などで、当用漢字以外の漢字が使用されている場合はそのまま用いた。

(例)

鴛鴦の契り (鴛も鴦も当用漢字以外の漢字)

驥尾に付す (驥は当用漢字以外の漢字)

- (3) また、現代かなづかいによって「ぢ」「つ」と表記するものについては、それぞれ「ぢ」「つ」の位置に置いた。助詞の「は」「へ」については、それぞれ「は」「へ」の位置に置いた。

(例1)

間に立つ

相槌を打つ

相手のもたする心

(例2)

皮一重

川へ流す

変わり果てる

- (4) 見出し語に外来語が含まれる場合、その表記は昭和二十九年国語審議会報告「外来語の表記」によつ

た。外来語の長音(ー)は、その発音がア列のものはア、イ列のものはイ、……というようにみなして配列した。

(例)

裾を肩に結ぶ

スタートを切る

頭痛の種

(スタートは、スタフトとみなす。)

三、解説文について

- (1) 解説は、原則として当用漢字及び現代かなづかいを用いて、簡潔に分かりやすいように記したが、当用漢字以外の漢字を用いたほうが理解しやすい場合には、(ー)の中に読みがなを入れて、当用漢字以外の漢字で表記した。また、外来語を使う場合には、「外来語の表記」によつて記した。

(例)

揚げ足を取る ……相手の些細(いさ)な言動を……

痛み分け ……一方が怪我(けが)を……。喧嘩(けんか)

や他の勝負事で……

枝に枝が差す ……外れて脇道(わきみち)に入る……

- (2) 解説は、原則として初めに「意味」を説明し、後に続けてその「用法」を記した。見出し語の読み替えや、相似している語句の場合は、解説の後に続けた。

(例)

足の向く方 どちらとも決まらず足の向いた方角

という意味で、気ままな気持ちや行動を表すときに用いる。「足の向くほう」とも読む。「足の向くまま」というようにも使う。

- (3) 解説の後に、**出・例・類・反**の順に記号で、出典・

用例・類句及び類語・反対句及び反対語を示した。

- (4) 「意味」「用法」で、以前は使われていたが現在はほとんど使われていない場合は示していない。

四、記号について

- (1) **出**は、出典を表す。成語・故事・名句などで、出典の明らかなものについては、できるだけ表記し、すべて(一)にその読みがなを入れた。

(例)

いざ帰らん ……**出** 帰去来辞(ききし)

螢雪の功 ……**出** 晋書(しん)

- (2) **例**は、用例を表す。解説文だけでは十分に意味が分らないと思われる場合には、用例を置いて、その用法の理解を深めるようにした。

(例)

いささかも ……**例**「驚かない」

しかるべき ……**例**「地位にある」

(3) 類は、類句・類語を表す。言い替えもできるように、できるだけ収録するようにした。見出し語にくつかの意味・用法がある場合には、当てはまる意味・用法にのみ類を置いた。

(例 1)

一衣帶水

……類①手の届くほどの距離 ②一牛

鳴地 ③一牛吼地(ういちゅうち) ④眼(め)と鼻の先

(例 2)

青天井 あおてんじょう 青い天井、つまり青空のこと。転じて、

屋外のことをいう場合にも用いる。類①露天

②野天

なお、相場がどこまでも上がると判断されるような状態にも用いる。

(4) 反は、反対句・反対語を表す。

(例)

男が上がる ……反①男が下がる ②男が廃る

③男がつぶれる

五、付録について

この辞典をより充実させ、さらに実用性を高めるために、主に日本・中国などの名言・金言などを集め、「金言・名文句集」として巻末にまとめた。むずかしいものには簡単な解説を加えて、より一層理解を深めるように努めた。

あ

合あい縁えん奇縁きえん 人と人とのつながりは、縁

(じ)で結ばれているという意味で、いやいや結婚した男女が人もうらやむ睦(じ)まじい夫婦仲になったり、親兄弟とは仲が悪いのに、他人とは肉親以上に親しくなったりするような、人と人との巡り合いの不思議さを表すのに用いる。 ①縁は異なるものの味なもの ②袖そで振り合うも他生たせいの縁 ③つまりずく石も縁の端(は) ④何事も縁

愛敬あいけい付き合あい 心の通い合う付き合いではなく、通り一遍の交際という意味で、上役の気を引くための追従的な態度や商売上の作り笑いなどを指しているのに用いる。 ①商売付き合

②義理の顔出し ③愛敬ほくろ

愛想あいさうが尽つくきる 愛情や好意が全くなくなってしまうという意味で、相手のためにいかに努力をしても少しの反応もなく、いやになつてはうり出してしま

場合をいうのに用いる。 ①愛想も小想せうも尽き果てる ②愛想づかし

間まに立つ 両方の中に入つて世話をするという意味で、仲の悪い人達を和解させたり、結婚の仲人として双方の家に話を付けたりする場合をいうのに用いる。 ①顧問に入る

相あ槌づちを打うつ 「相槌」とは、鍛冶(かじ)で互いに打ち合わせる槌(づち)のことで、相手の話や意見・主張に対して調子を合わせてうなずくことを表す場合に用いる。

相あ手てのもたする心こころ 相手のもっている心がこちらの心のもちように影響するという意味で、相手の出方でこちらの動きを決めようとする場合などをいうのに用いる。 ①相手の出方次第

相あ盗どろ人 一緒に計画を立てた盗人同士の意味で、ひそかに秘密を謀り合った仲間をいう。 ①同じ穴の貉(くさび)

愛別難苦あいべつがた 愛する者との死別・生別の悲しみや苦しみという意味で、別れのつらさを表現するときなどに用いる。 ①五王経ごおうきやう ②哀別悲離

曖味あいまい模糊もこ 「曖味」も「模糊」も、はっきりしないこと、ぼんやりしたさまという意味で、物事がはっきりせず、まぎらわしくぼんやりしている状態をいう場合に用いる。

阿あ吽うんの呼吸こそく 「阿吽」は仏教語で、「阿」は吐く息、「吽」は吸う息のこと。また、神社にある狛犬(こゝ)などのように向かい合つて相對するものを「阿吽」というところから、相撲の仕切りのように、相對する者が心をびたり一つにするときなどの言葉として用いる。

青息吐息せいそく 「青息」は、苦しみ嘆いたときに出るため息という意味。苦しくて困ったときに吐くため息を指している。また、そういったため息の出るような困り切ったさまをいい表す場合にも用いる。 ①青菜に塩 ②蛭蟪(むし)に塩 ③青菜を湯につけたよう

青き眼あおめ 青眼(あおめ)、すなわち、晴れ晴れした目という意味で、気に入らない客は白い目で見、気に入った客は青い目で迎えたという中国の故事から、好きな客を喜んで迎えるすがすがしい目付





きをいう場合に用いる。「青い眼」ともいう。**〔田晋書いひ〕**

青筋を立てる 怒るとこめかみに青筋が浮き出ることから、心底から激怒したり、興奮したりしたときの形容に用いる。**〔類〕**①怒髪天を衝く ②顔面朱を注ぐ ③怒りに声も出ず ④腸（いん）が煮え返る

青田買い 稲がまだ青いうちに、将来の利益を見越して買い上げるという意味で、物になるかどうか分からぬうちに先物買いをすることをいう。また、学校の卒業までには、かなりの期日があるのに、会社などが早々と卒業後の採用を決めてしまうことを指している場合もある。**〔類〕**①青田刈り ②不見転（みづ）買い

青田の先売り まだ稲が実らぬ前に収穫高を予想して産米を売るという意味から、先を見越して物を売ることのたとえとして用いる。

青田の波 青々とした稲田が風に波打っているさまをいい、夏の季節を表す季語として多く使われる。

青天井 青い天井、つまり青空のこと。転じて、屋外のことをいう場合にも用いる。**〔類〕**①露天 ②野天

なお、相場がどこまでも上がるかと判断されるような状態にも用いる。

青葉の花 青葉の中に混じって時期遅れに咲いた梅の花のことで、夏の季語として用いる。**〔類〕**余花（あ）

青柳の糸 葉が青々と茂った柳のしだれた枝が糸のように見えるさまをいう。詩歌などで用いる。

青柳の眉 柳の葉のようにすんなりした形をした眉、すなわち、女性の眉を指している場合に用いる。一般には、美人の顔の形容に使う。**〔類〕**柳眉（りゅう）

足掻きが取れない 「足掻き」とは、動物が前足で地面をかくことをいい、気をもんでも、どうしようもないほど行き詰まっている状態をたとえていう場合に用いる。**〔類〕**①二進（に）も三進（さん）も行かない ②動きが取れない ③手も足も出ない ④暗礁に乗り上げる **赤き心** 偽りのない心、真心を指している

う場合に用いる。**〔類〕**赤心（しやくしん）
証が立つ 無実が証明されるという意味に用いる。**〔類〕**明かりが立つ

あかずの間 普段は開けることを許されない部屋のことで、主に、不吉な事があって閉ざされたままになっているような部屋や使用禁止の部屋を指しているように用いる。「あかずの間」ともいう。**〔類〕**あかずの門

上がった どうしようもなくなってしまうという意味で、仕事や商売がだめになつてしまったときに用いる。また、物事がうまくいかないときにも使う。**〔類〕**お手上げ

飽かぬ仲 飽きがない間柄、親密な仲という意味で、離別など考えられない、仲のいい夫婦や恋人・友人などを指している場合に用いる。

赤の他人 「赤」には、明らかなこと、はっきりしていることなどの意味があり、ここでは、他人であることの強調語。全くの無縁・無関係の間柄を示す場合に用いる。**〔類〕**路傍の人 ②無縁の人

上^あがり口^{ぐち}が高^{たか}い。「上^あがり口^{ぐち}」とは、土間から座敷や階段などへ上^あがる所、または、家の入り口のこと。不義理が重なったりして、その家に行きにくいことをたとえていう場合などに用いる。

園敷居^{おんしき}が高^{たか}い

上^あがり^{あがり}を請^{まね}ける 安いときに買っておいで、値^ねが上^あがったときに売^うってもうけることをい、相場^{ちやうば}などに多く用いる。「上^あがりを得^える」ともいう。

図

下^{した}がり^{あがり}を請^{まね}ける

垢^{あか}を脱^だぐ 体^{からだ}に付着^{つしやく}した垢^{あか}や汚^{よご}れをぬぐい落^おとすという意味から転じて、降り懸^かかった汚^{よご}名^なをすすぎ、身の潔白^{けつぱく}を証明^{しやうめい}すること、疑惑^{ぎわく}を取り去^はることをたとえていうのに用いる。

例①証^{しやう}を立^たてる ②垢^{あか}を抜^ぬく

秋風^{あきかぜ}が立^たつ 秋風^{あきかぜ}が吹き始めるといふ意味だが、「秋^{あき}」を「飽^あき」に掛けて、好き^{すき}だった相手^{あいて}がきらいになつてきたという場合に用いる。また、相互^{さうご}の關係^{けんが}がまづくなつてきたという場合などにも用いる。

例①秋^{あき}を吹^ふかす ②熱^{あつ}が冷^{ひや}める

秋澄^{あきすみ}む 秋^{あき}になつて空^{そら}が高^{たか}くなり、空^{そら}氣^きがひんやりとして澄^{すみ}んだようになる状態^{じたい}をいう場合に用いる。

例①秋^{あき}うら

ら ②秋涼^{あきすず}し ③秋高^{あきたか}し

秋近^{あきぢか}し 秋^{あき}が近^{ぢか}付^ついて、ああもう夏^{なつ}も終^{しま}わりだなあという感じをいうときに用いる。また、残暑^{ざんしよ}が厳^{げん}しく、早く秋^{あき}が来^きたらいいのに、という願望^{がんぼう}を表^{あらわ}す場合^{ばあい}にも用いる。

例①秋^{あき}かたまけて

②秋迫^{あきせま}る ③秋隣^{あきりん}る

秋^{あき}の愁^{おも}え 何^{なん}となく寂^{さび}しいような物悲^{ものかな}しい気分^{きふん}という意味で、夕暮^{ゆふぐ}れの情景^{けいけい}や、心^{こころ}の寂^{さび}しさを表^{あらわ}すような場合に用いる。

例①秋^{あき}に秋添^{あきぞ}う ②秋^{あき}の扇^{あふ} ③秋^{あき}の聲^{こゑ} ④秋^{あき}の心^{こころ}

秋^{あき}の日は釣瓶^{てうべい}落^おとし 秋^{あき}の日は落^おち始めると、まるで釣瓶^{てうべい}を井戸^{いど}に投^なげ込んだように、さつと落^おちてしまふという意味で、秋^{あき}の日暮^{ひぐし}れの早^{はや}いことをたとえていう場合に用いる。

例①秋^{あき}の日の鉈^{なた}落^おとし

秋^{あき}を吹^ふかす 「秋^{あき}」を「飽^あき」に掛けて、もう飽^あきていやになつてしまつたとい

うことを表^{あらわ}す場合に用いる。

例①秋^{あき}風^{かぜ}が立^たつ ②熱^{あつ}が冷^{ひや}める

悪^{あく}因^{いん}果^{くわ} 原因^{げんいん}が悪^{あく}ければ必ず結果^{けつこ}は悪^{あく}くなるという意味で、元^{もと}が悪^{あく}ければ小細工^{せうさい}などしてみてもよい結果^{けつこ}は生^はまれない、あるいは、行^いいが悪^{あく}ければ、それが元^{もと}で悪^{あく}い結果^{けつこ}が生^はずるといふこと

のたとえに用いる。

例①惡^{あく}の報^{ほう}いは針^{はり}の先^{さき} ②猪^ぶ食^くった報^{ほう}い

灰汁^{はいじ}が抜^ぬける 「灰汁^{はいじ}」は、植物^{しょくぶつ}の中に含まれる渋味^{しぶみ}を帯びた液^{えき}のこと、人の性質^{しやうしやう}などが、癖^{くせ}が抜^ぬけてさっぱりと洗練^{せんれん}されたものになるという場合のたとえに用いる。

例①垢^{あか}を抜^ぬける ②渋皮^{しぶかわ}がむける

惡逆^{あくぎやく}無道^{むどう} 人の道^{みち}に反^{はん}したむごいほどの惡事^{あくじ}という意味で、顔^{かほ}を背^{そむ}けるようなひどい行爲^{こうゐ}を指^さして用いる。

例①「あくぎやくぶどう」とも読^よむ ②惡業^{あくごふ}非道^{ひどう}

惡態^{あくたい}をつく 惡口^{あくぐち}を言^いうことを指^さしていう。

例①惡憎^{あくぞう}まれ口^{ぐち}をたたく

惡天^{あくてん}候^{こう}を売^うる 天候^{てんこう}が悪いので豊作^{とんさく}が危ぶまれるため、買^かい注文^{しゆもん}が殺到^{せつたう}する、



その機会をねらって売りまくることをいう。主に、米相場の用語として使われる。〔因悪天候を買う〕

あくびをかみ殺す あくびが出そうになるのを我慢して口の中にのみ込むことをいい、飽き飽きしてしまったような状態をいう場合に用いる。〔願あくびを押さえる〕

あぐらをかく 足を組んでゆったりと座るという意味から、一般に、ずうずうしく構えることをいう場合に用いる。〔願居座る〕

明くる今日 その明くる日である今日の事という意味で、昨日までの出来事を述べてきて、今日の出来事について言及する場合に用いる。

揚げ足を取る 相手が揚げた足をすかさず取って倒すという意味から、相手の些細(こ)な言動を取り上げて皮肉を言ったり、なじったりすることのたとえに用いる。「揚げ足取り」ともいう。〔願言葉尻(ことば)を捕らえる〕

挙げ句の果て 「挙げ句」は、「揚げ句」

とも書き、連歌や俳句の終わりの二句をいい、「果て」も、同じく終わりを意味するところから、最後の最後というような場合に用いる。〔願①とどのつまり ②終局〕

上げつ下ろしつ おだてたりこき下ろしたりする状態をいい、人を説得しようとしているときなどに用いる。〔願①上げたり下げたり ②ほめたりけなしたり ③おどしたりすかしたり〕

朱に染まる 「朱」は、朱色のことで、血まみれになるさま、あるいは、空などが血に染まったように赤くなる状態をたとえていったりする場合に用いる。〔願朱になる〕

朱の涙 血の涙のこと。涙が出尽くすと血が出るといわれるところから来た言葉で、ひどく悲しんで泣く様子をいうのに用いる。主に、女性の涙の形容に使う。

明けの春 一夜明けて、新たに訪れた春という意味で、年の初めの春(はる)ぎの言葉などに用いる。〔願①今朝の春 ②新春〕

顎が落ちる 味がよくうまいことのたとえに用いる。〔願顎(あご)が落ちる〕

顎が外れる 大口を開けると顎が外れるという意味から転じて、大笑いする様子というときのたとえに用いる。

顎が干上がる 飢えて口の中が渴き切ってしまうという意味から、貧乏で生活がひどく苦しい状態をたとえている場合用いる。〔願①口が干上がる ②飯が食えなくなる ③暮らしが立たなくなる〕

顎から先に生まれる 口が達者でよくしゃべるさま、また、その人を指している場合に用いる。〔願①あごたから先に生まれる ②口から先に生まれる ③顎高い〕

顎を出す 疲れると顎が前に出るという意味から、ひどく疲れた様子や、どうにもならない状態をたとえている場合などに用いる。〔願疲労困憊(へうこぼれ)〕

朝顔の露 朝顔の花に宿った露という意味から、つかの間の出来事や、はかないものなどをたとえている場合に用い

る。 ①朝顔の花一時(ひととき) ②朝顔は晦朔(みづく)を知らず

糾(よ)える縄(なわ)「糾(よ)える」は、より合わせ、

なうの意味で、よった縄のように、福と災いは互いに絡まり合つて離れないものだといふような場合のたとえに用いる。 ③禍福は背中合わせ

朝(あ)の命(いのち) 生命は朝露のように短くはかないことを表している場合に用いる。

④①蛭(むし)の命 ②露命

麻(あ)のごとく 麻糸のように、という意味で、一般に、「麻のごとく乱れ」といふた使い方をする。世の中などの状態の混乱した様子を、もつれた麻糸にたとえていう場合に用いる。 ③①乱麻

②糸の乱れ

朝(あ)日(ひ)が西(よ)から出る 朝、太陽が西から昇るといふ意味で、ありえないことをたとえていう場合に用いる。 ④①乱川の水が逆さに流れる

朝(あ)日(ひ)の昇(のぼ)る勢(いきさ) 朝の太陽が勢いよくぐんぐん昇るところから、勢力が盛んなさまをたとえていう場合に用いる。



「朝日の昇るごとし」というようにも使う。 ⑤①旭日(きょくじつ)の勢(いきさ)

薊(あざ)の花(はな)も一(ひと)盛り あまりばつとしない薊の花でも、それはそれできれいな時期があるものだといふ意味で、転じて、たとえ見目かたちの劣つた女性でも、ある年齢に達すれば、それなりに魅力が出て来るものだといふことをたとえていう場合に用いる。 ⑥①蕎麦(そば)の花も一盛り ②番茶も出花

朝(あ)焼(や)けはそ(そ)の日(ひ)の洪水(こうすい) 朝、東の空が真っ赤になると、その日は大雨が降るといふことを表す場合に用いる。 ⑦①朝虹(あさにじ)はその日の洪水

朝(あ)夕(ゆふ)の煙(けむり) 朝夕、炊事のときに上がる煙のことで、転じて、毎日の暮らし、生活のことを指しているのに用いる。

足(あし)掛(か)りを作る 相手との関係を作るといふ場合に用いる。 ⑧①手掛(てか)かりを作る ②コネを付ける

足(あし)が地(ち)に付(つ)く 足がしっかりと地を踏まえているといふことから、振る舞いや、感情・気分などがしっかりとっていること

と、落ち着いている様子などをたとえていう場合に用いる。

足(あし)が付(つ)く 駆け落ち者の逃げた足取りが分かるという意味から転じて、逃亡者の行方が分かる、または、犯罪事実を証明する糸口が見付かる、悪事が露見するといふ場合のたとえに用いる。

⑨①足が出る ②襦袢(じゆばん)が出る

足(あし)が強い 足腰がしっかりとっていることをいい、船にスピードがあることや揺れないこと、あるいは、食物のなかなか腐りにくいこと、餅(もち)に粘りがあることなどをいい表すのに用いる。

足(あし)が出る 人前などで足を出すのは礼儀や決まりに反するといふ意味から転じて、収入や予算を超過した金額を使うといふ場合に用いる。

また、隠していた事が表面に現れる、露見するといふときのたとえにも用いる。 ⑩①足が付く ②襦袢(じゆばん)が出る

足(あし)が早い 歩くことが早いといふ意味から転じて、腐りやすい食物や、すぐに売りさばける商品などをたとえていう場合に用いる。



足が向く 無意識のうちに、自然に、ある一定の方向や場所に行ってしまうということを表すのに用いる。

朝に墨をかすく 「かすく」は、頭に載せる、頂くという意味。まだ頭上に星を仰ぐ早朝に起きて働くということから転じて、勤勉な様子をたとえていう場合などに用いる。 〔圓朝星（あきほ）〕

足玉手玉に取る 「足玉手玉」は、上代、足や手に飾りとして付けた玉のことで、その玉を扱うように軽々と取り扱うことをいう。主に、人や生き物などを自由自在に弄ぶ（あそぶ）ような場合を表すときに用いる。「手玉に取る」というようにも使う。

足駄を履かせる 「足駄」は、二枚の高い歯の付いた下駄（ふた）のことで、その高い歯の下駄を履かせるという意味から転じて、実際の価値より高い評価を下したり値段を付けたたりすることのたとえに用いる。

味な事をやる 手際よく鮮やかに処理することをいう場合に用いる。 〔圓乙な（おと）〕

事をやる

足の向く方 どちらとも決まらず足の向いた方向という意味で、気ままな気持ちや行動を表すときに用いる。「足の向くほう」とも読む。「足の向くまま」というようにも使う。

足下から鳥が立つ 足下にいた鳥が急に飛び立ったため、びっくりして慌てふためくという意味で、身近な所で起こった突発事件に、不意を討たれたときのたとえに用いる。 〔圓①周章狼狽（しゅうしょうばい）〕 ②泡（あ）を食う

足下に火が付く 危険や災いなどが身に迫っているという意味で、物事が切羽詰まっていることを表す場合に用いる。 〔圓①尻（しり）に火が付く ②焦眉（しゆめい）の急 ③燃眉（もんめい）の急〕

足下の明るいうち 日暮れ前の足下が確かなうちに行動せよという意味から、何事も手後れにならないうちに、または、自分の悪行や弱点などが発見されて不利な状態にならないうちに、という場合のたとえに用いる。 〔圓怪我（かいが）のないうち〕

足下へも寄り付けない 相手が立派過ぎるので近付くことができないという畏敬（けい）の意味から、相手と自分が比べ物にならないというような場合に用いる。 〔圓①足下にも及ばない ②月と籠（かご） ③雲泥（うんぬ）の差〕

足下を見る 馬子（うまこ）や駕籠（かご）かきは足の疲れた客に駄賃（だちん）を吹っ掛けるということから、人の弱みに付け込んで何事かを行うことのたとえに用いる。また、相手から弱みに付け込まれる場合には「足下を見られる」というように使う。 〔圓①足下を見立てる ②足下へ付け込む ③弱点に乗じる ④弱点を突く ⑤泣き所を押す〕

足を洗う 田植え作業などで泥（どろ）だらけになった足を洗うという意味から転じて、卑賤（ひでん）な職業や悪事の世界と縁を切って、まともになるという場合のたとえに用いる。一般には、「サラリーマン稼業（かせぎ）から足を洗う」というようにも使う。

味を占める 一回味わった味が忘れられないで次にもそれを期待するという意

味から、一度うまい事で利益を得ると
場子に乗って同じ事を繰返すという
場合のたとえに用いる。〔類〕柳の下の
泥鰌(どろこ)

足を溜める 足を地に付けること、転じ
て、踏みとどまることをいう場合など
に用いる。〔類〕足をとどめる

足を引っ張る 他人の行為や成功を邪魔
すること、また、物事を集団で行うと
き重荷になるような行動を指している
場合に用いる。

足を棒にする 足が擦り減るほどに歩き
回るといふ意味で、あちこち歩いて極
度に疲れることのたとえに用いる。

〔類〕①足を搦(とり)粉木(こな)にする ②奔
走する

預かりを取る 「預かり」は、預かり証
のこと。すなわち、預かり証書を受け
取ることを表す。

あずり貧乏「あずり」は、あがくこと、
奔走することという意味で、一生懸命
あくせく働いても貧乏から抜け出せな
い場合を指しているのに用いる。「あ

ずり貧乏人室(ひんぱんじんしつ)」というようにも
使う。

汗になる 汗を出すという意味から、汗
水を流して働くことをいう場合に用い
る。〔類〕汗を流す

また、冷や汗をかくような恥ずかしい
思いをすることをいう場合にも用い
る。「汗となる」というようにも使う。
〔類〕汗をかく

汗を流す 労働するといふ意味と、入浴
するといふ意味の二つの場合に用い
る。〔類〕汗になる

徒の火宅 「徒」とは、虚(うそ)しくはかな
いこと。「火宅」とは、人間社会を延焼
中の家にたとえた仏教語。現実社会の
はかなく苦しいことをたとえているの
に用いる。〔類〕火宅無常

徒の格気 自分とは関係のない他人の恋
に嫉妬(やま)をするといふ意味から、野
次馬(のうせう)の根性などのたとえに用いる。
〔類〕①岡(おか)変(か)り ②法界格気

仇は情け むごい仕打ちが結果的にはか
えって情けになるといふ意味で、一般

には、情けを掛けることだけがいい結
果を生むとは限らないといふことのた
とえに用いる。

頭打ち 取引相場が高騰の頂点に達する
こと。物価がぎりぎりの高値にまで上
がったときや、物事が行き着く所に行
き着いて、それ以上の進展が望めなく
なったときなどにも用いる。「ずうち」
ともいう。〔類〕天井打ち

頭の天辺から足の爪先まで 上から下ま
で余すところなく全部といふ意味で、
何から何まで一切合切といふ場合など
に用いる。〔類〕①頭から尻尾(しっぽ)まで

頭をはねる 他人の働いた収入の一部を
かすめ取るといふ意味で、他人の労働
や収益を利用して、自らは勞せずして
利益をあげる場合などに用いる。〔類〕
①上前(うへまへ)をはねる ②ピンをはねる

頭を丸める 髪をそって坊主頭にするこ
と、転じて、僧になることをいう場合
に用いる。また、罪を悔いて懺悔(げんげ)
したり、反省したりするような場合を
表すのにも用いる。





新しい空気 新しい時代に生まれた新しい様子や雰囲気(ふんいき)という意味で、主に、新時代の文化や思想について用いる。
 ①新しい波 ②新しい風

あたら花を散らす 「あたら」は、惜しくも、もったいなくも、という意味。惜しくも花が散ってしまったということ、一般には、若くして虚しく死んでいった人などを惜しんでいる場合などに用いる。

辺りに人なきがごとし まるで周りにだれもないようだという意味で、遠慮のない振る舞いを指している場合に用いる。
 ①傍若無人(ぼうじやくびん)

辺りを輝かす 人の体から光が出て、周りを照らし出すように感じられるという意味で、人格や容姿・服装などが立派なことをたたえるときに用いる。
 「辺り輝く」ともいう。

辺りを払う 大勢いる中で一人際立って近寄り難いという意味で、堂々として目立ち、周りを圧している様子をいい表す場合に用いる。
 ①辺りを圧す ②辺りを制す ③他を圧す

当たるを幸い 取捨選択の別なく手に触れたものすべてをよしとして、という意味で、ぶつかったものをすべて選ぶことなく相手にするようなどに用いる。
 ①当たる任せ ②手当たり次第 ③盲滅法

仇を恩で報いる ひどい仕打ちを受けても、それを仇と考えずに恩で報いるという意味で、人道を説く訓戒などに用いる。
 ①仇を情けに引き換える

②恨みに報ずるに徳をもってす ③恩を仇で返す

熱い戦争 英語の Hot war を訳した言葉で、外交や政治上の交渉を抜きにして、直接武力に訴えて行う戦争を指しているのに用いる。
 ①冷たい戦争 (cold war)

悪貨は良貨を駆逐する 品質の悪い貨幣が出回ると品質の良い貨幣が市場から隠れてしまうという「グレッシュムの法則」から来た言葉で、たちの悪い人間がはびこって優れた人間が姿を消し、悪が栄え善が減びるということをとえていう場合に用いる。

悪口を切る 人を悪く言うこと、悪口を言うことを意味し、特に、あしざまにののしるようなときに用いる。「悪口をつく」ともいう。

あつてなきがごとし あつてもないのと同じという意味で、役に立たない存在をたとえていう場合などに用いる。
 ①無用の長物

あつてもあらぬ そこに居ても居るような気持ちになれないという意味で、じつとしてはいられない気持ちを表す場合に用いる。
 ①いたたまれない ②居ても立ってもいられない ③あるにもあらぬ

羹に懲りて膽を吹く 一度熱い汁(しる)で舌を焼いて懲り、その後は冷たい和(わ)え物を食べるにも口で吹いて冷まして食べるという意味から、前の失敗に懲りて必要以上の用心をすることのたとえに用いる。
 ①出鱈目(でたらめ) ②船に懲りて興(き)を忘(わ)る ③呉牛(こぎう)月(つき)に喘(うづ)ぐ ④蛇(へび)に咬(か)まれて朽(く)ち繩(じゆ)に怖(こ)じる ⑤火傷(やけど)火に怖(こ)じる